



TITLE:

[東洋史研究會]大會抄録

AUTHOR(S):

---

CITATION:

[東洋史研究會]大會抄録. 東洋史研究 2009, 68(3): 540-545

ISSUE DATE:

2009-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167618>

RIGHT:

## 大 會 抄 録

### 秦漢時代における名数の移轉

保 科 季 子

名數（單に數とも言う）とは戸籍のことである（『漢書』顏師古注）。睡虎地秦簡や張家山漢簡等の新出土資料の發見により、秦漢時代の戸籍制度の實態が明らかになりつつある。本報告では、これらの新出土資料をもとに、特に戸籍である名數を移轉させる手續き（徙數）について考察するものである。

張家山漢墓出土『二年律令』戸律には、名數移轉の手續きや不正の折りの罰則についての律文があり、また睡虎地秦簡『法律答問』にも、吏が籍を改める手續きを怠った際の罰則について記述があり、さらに里耶秦簡にも、年籍を移轉させなかったことが問題とされている文書が存在する。これらの史料より、名數を移轉させるにあたり、嚴密な手續きが要求されていたことがわかる。

實際の名數の移轉手續きそのものを示す史料はいまだ發見されていないが、隨葬文書として「告地書」（もしくは「告地策」と呼ばれる文書が出土している。これは、墓主の死出の旅にあたり、地下の官吏に宛てた送り状および墓主の名數である。これら「告地書」はあくまでも地下文書あるいは冥界文書であり、實用の文書ではないが、ある程度忠實に實際の文書形式を眞似て作成され

たと考えられ、移住に際する名數の移轉手續きを類推する手がかりとなり得るであろう。

### 一九一三年の露中宣言とモンゴルの政治的地位

橘 誠

一九一三年十一月五日に成立した露中宣言は、一九一一年十二月のモンゴルの獨立宣言後、初めて中國・モンゴル關係を規定したものであり、それは中國が清朝版圖内にあった「藩部」との關係を初めて規定したことも意味する。

モンゴルの政治的地位は、一九一二年十一月三日に締結された露蒙協定において、「モンゴル（國）」の「自治」が合意されたが、モンゴル側はこの協定文作成の際にモンゴル語譯「萬國公法」を利用し、アメリカの獨立宣言文中の「自主自立」の語を引用して「自治」を「獨立」の意で解釋しようと試みていた。

一方、ロシアは對中交渉において、中國・モンゴル關係をオスマン・トルコとバルカン諸國を事例とした解決、すなわち中國の「宗主權」とモンゴルの「自治」という形で妥結を圖った。だが、バルカン情勢が緊迫化する中で譲歩を續け、一時は實質的に中國の「主權」を認める形で協定が成立しかけた。

この露中交渉に對して、モンゴル側は「萬國公法」をもとに抗議、また露蒙協定を締結したコロストヴェツがベテルブルクに戻ると、外相サゾフを説得して當初のロシアの方針に立ち返ら

せ、宣言は成立した。

露中宣言についてのモンゴル・ロシア・中國の解釋の隔たりは大きく、最終的な解決はこの三者によるキャフタ協定を待たなければならなかったが、中國・モンゴル關係については露中宣言が基礎となり、モンゴルの内政からは中國の干渉が排除され、後の「モンゴル革命」を容易にしたのである。

## 南朝の新興貴族

川 合 安

南朝時代は、門閥貴族社會が固定化した時代とされる一方、寒門（下級貴族）・寒人（庶民）の官界進出が激化する下剋上の時代ともとらわれてきた。この通説的理解に従えば、寒門・寒人は、その軍功や財務能力等によって高位高官を獲得したとしても社會身分的には甲族（上級貴族）に昇格することなく、依然としてもとの社會的身分——下級貴族・庶民にとどまる、と考えられよう。

だが、右のような通説的理解に、少なくとも完全には適合しない事例が史書に散見することも事實である。たとえば劉宋の寒門武人、沈慶之（吳興の沈氏）は、その軍功により、三公にまで上昇する。この沈慶之は、読み書きもできず、貴族的教養はなかったが、その長子文叔は、中書郎、黃門郎をへて侍中となっており、文叔の弟、文季も祕書郎、中書郎、黃門郎などをへて侍中、尙書

左右僕射となるなど、その官歴は上級貴族のものであるし、文季は王錫（琅邪の王氏）の娘と婚姻してもいる。また、寒人出身の王敬則（晉陵の人）は、宋齊革命の際に軍功をあげ、南齊王朝で三公にまで上昇する。この王敬則も読み書きを知らなかったといわれるが、その長子元遷は、黃門郎となっているし、娘は謝朓（陳郡の謝氏）と婚姻している。本報告では、これら新興貴族とも稱し得る事例の検討を通じて、南朝貴族制とはいかなる貴族制なのか、その内實を考えてみたい。

## 前漢鏡とその銘文

岡 村 秀 典

漢鏡の研究は、古代の金石文について關心の高まった宋代にはじまり、清代には考證學の一分野として鏡の著録と銘文の釋讀が進められた。こうした成果をもとに羅振玉は漢鏡の銘文を集成し、カールグレンは言語學的な研究を開拓した。同じころ富岡謙藏は圖像紋様の様式論にもとづく漢鏡の編年に着手し、戦後は日中兩國で考古學による細かな年代研究がさかんとなった反面、銘文の研究は久しく停滞している。そこで本報告は、前漢鏡の様式を大きく四期に分け、時期ごとの銘文の變化を検討しようとするものである。

前二世紀前半の漢鏡一期は、とぐろを卷いた龍を主紋とし、雜言體の短い銘文をもつ鏡が淮河流域を中心に流行する。前二世紀

後半の漢鏡二期には、長安で草葉紋鏡や銘帶鏡などの新しい意匠の鏡が創作され、現實の樂しみを求める三字句や四字句、『楚辭』の詩形をもつ抒情的な七字句の銘文があらわれる。これを用いて前一世紀前半の漢鏡三期には、失意の託された『楚辭』系の賦や遠くに旅立つ夫を送る妻の悲歌など抒情的な銘文を主紋とする銘帶鏡が中心となる。しかし、前一世紀後半の漢鏡四期には、識緯思想を背景に、瑞獸を主紋様とする方格規矩四神鏡や雲氣禽獸紋鏡が出現し、陰陽五行にかなう性質と圖像をもつ鏡の效能や儒家の思想信條を唱えた七字句の銘文が主流となる。そして、王莽が國政を總攬すると、鏡の銘文はその施策をひろく宣傳するのを利用されるようになった。

### 初期イスラーム哲學における二つの形而上學

——哲學構築と發出論の論理構成——

仁 子 壽 晴

世界生成を説明するためにはさまざまな方法がありうるが、イスラームを含む一神教的世界、つまり一つの神を立てる世界で有力であると目されていたのは創造論と發出論であった。對比を利かせるために極端な解釋をするならば、創造論は神が自らとは異なる存在として世界を創造したとの論であり、神と世界は非連續なものと考ええる。他方、發出論は一なるもの自らがあふれ出す(發出する)ことで多なる現象界、世界が現れると考える。後者

は一と多、言い換えれば神と世界の連續性を想定しているのである。一二世紀ごろまでの古典的なイスラーム思想世界では、イブン・スィナー(d1037)の哲學を神學の立場から批判したガザリー(d1111)による『哲學者たちの自壞』、イブン・ルシユド(d1198)『自壞』の自壞』に見える哲學側からの再反論が有名であり、現代の解釋ではその對立構造をもとに創造論を神學側に、發出論を哲學側に寄せて考えるのが定跡となっている。

しかし題目にある「二つの形而上學」は創造論と發出論を指すのではない。本発表が対象とするのはいわば二つのタイプの發出論であり、ファーラービー(d950)やイブン・スィナーの著作には、一般に神學・哲學の對立構圖のなかで採りあげられているタイプの發出論以外に別のタイプのもの、「純粹な」發出論とは別の發出論が存在することを問題化したい。二つの發出論が存在することを考慮した場合に読み取れる哲學構築は一つのタイプだけに特化した場合と異なるものになることは十分に豫想されよう。きわめて萌芽的な試みであるが、この二つのタイプの發出論を手掛かりに初期イスラーム哲學の読み直しを目指すつもりである。

### アルシャク朝バルテシア政治史上の諸問題

春 田 晴 郎

紀元前三世紀半ばに興り、前二世紀後半から後三世紀初め頃までイラン高原からメソポタミア平原にかけての樞要部を支配した

アルシャク（アルサケス）朝バルティアの政治史研究の状況について、ここ十数年新たな材料を提供してきた関連楔形文字史料の出版が一段落した現段階でまとめ、なお残る論點についていくつかが指摘したい。

前一四一年メソポタミアに進出する以前の小國時代については、史料の質についての吟味が依然として不十分であることを、「ミトリダテス（ミフルダート）一世」とされる王名を例に論ずる。また最初期の都として述べられる「ダラ」の地形描寫がダルギャズのそれにほぼ一致することなどを述べる。

前一世紀前半の「暗黒時代」については、貨幣學者の數多い研究があるが未だ定説となるものは出ていない。グルジア出土アルシャク朝貨幣なども利用しながら、「謎の王」をそれほど創出しなくて済む現実的な解決案をいくつか提示する。

紀元後については、必ずしも王位争いが熾烈を極めていたと見る必要がないこと、などを指摘する。

支配領域や中心地域の推移から、この王朝の性格、イラン史における意義にも觸れる。

## シヤム近代化論再考

——チャクリー改革期における對外關係史の  
視點から——

小泉 順子

本報告は一九世紀末におけるシヤムの對外關係を再検討しつつ、そこからチャクリー改革を再考する視座を探ることを目的とする。周知の如く一九世紀後半、とりわけ一八八〇年代以降におけるアジアは、フランス、イギリスなどヨーロッパ列強による本格的な植民地化の時代を迎え、シヤムにおいても、英・佛の壓力に抗することが最大の課題となった。植民地化の危機に直面したシヤムでは、法、教育、軍事、財政などの諸側面において、西洋の制度を導入しつつ制度改革が進められ、バンコクの支配域を広げつつ、國王を中心とする中央集權國家體制が整備されていった。本報告では、こうした英佛を中心とする對西洋諸國との關係を重視する對外關係史の中で看過されてきたシヤムと周邊諸國との關係に光をあててみたい。とりわけ植民地勢力の動きと並行して、一九世紀後半から二〇世紀初頭におけるシヤムの對外關係において、重要であり続けながらもこれまで十分な検討を免れてきた中國との關係を見直しつつ、そこからチャクリー改革を、シヤムをとりまくアジア諸國との關係史の文脈に位置づけていく視座を考えていきたい。

## 中國清代社會における各構成體機能の地域比較

——訴訟關係文書を資料として——

白 井 佐知子

本報告は、清代の中國地域社會において、訴訟など紛争が生じた場合、その紛争が発生するに至った原因と経緯において、あるいは處理や解決において、宗族、紳衿、地保などの各構成體がどのように機能していたかを安徽省徽州府、四川省重慶府巴縣、江蘇省太湖廳の例をとりあげて検討し、清代中國地域社會の一端を示そうとするものである。

用いる資料は、王鈺欣等主編『徽州千年契約文書』および劉伯山主編『徽州文書』中の訴訟關係文書、京都大學の夫馬進氏が収集された巴縣檔案中の訴訟文書の一部、國立國會圖書館藏の太湖廳檔案中の訴訟文書等である。但し、これらの資料は質、量ともに隔たりがあり、作成された時期や官民文書の別なども必ずしも同じではない。従って、これらを單純に比較することはできない。しかし、徽州では族人間の争いが多く、そのことが逆に同族間での解決を困難にしていたのではないかということ、また衿すなわち生員の勢力が強い傾向があること、巴縣では他にみられない實の親子間の訴訟がみられること、太湖廳では地保が解決できないとき自身が縣に訴えている例があることなどがみられる。他方、共通性ともいうべきこととして、費用がかかるにもかかわらず些細ともいえることで縣や府に對して訴えを起こすことが日常的に

行われており、それによって利益を得ていた者の存在が推測される。これらの事象の背景にどのような社會の特性があるのかを考えてみたい。

## 現代中國における陶行知教育思想の繼承と展開

小林 善文

陶行知（一八九一—一九四六）は、現代中國を代表する教育家であり、その教育思想や實踐をめぐる研究成果は多い。しかし、陶の思想が中華人民共和國で影響力を持ち續けた要因を探索する研究はほとんど見られない。この報告は、陶の教え子であった方與嚴（一八八九—一九六八）、劉季平（一九〇八—八七）、張健（一九二一—生）の三人を取り上げ、陶の教育を繼承し、中國社會に生かしていった経過と特色を追うことによって、今日に生きる陶行知精神の姿を考察する。方與嚴は曉莊學校における陶より二歳年長の教え子であるが、生活教育理論を實踐し、科學教育を救國の手段と主張して陶を繼承しながら『新教育史』を執筆して陶が苦手とした分野をカバーした。劉季平も曉莊學校で學び、生活教育を重視して「學用一致の精神」を説き、晩年には鄧小平教育思想を重視し、圖書館システムの現代化を通して教育水準の向上を圖った。張健は曉莊餘兒崗兒童學校に學び、新中國成立後に活動を本格化した。教師集團の活動を重視するなど現場の聲を反映した教育政策の推進に努めた。三人とも一九五〇年代の「陶行知教育

思想批判」運動で恩師を批判することを迫られ、社會主義教育の優位性を説く。しかし、それぞれの思想内容を掘り下げると陶行知教育思想の精神を現代中國に生かすとともに、内實においては中國の教育界では否定されている「教育救國論」の主張に近づいているのである。

## 中央アジア出土古ウイグル手紙文書の書式研究・序説

森 安 孝 夫

古ウイグル手紙文とは、九世紀後半―一三世紀初頭に東部天山地方を中心にして存続した西ウイグル王國の人々と、その地がモンゴル帝國の支配下に入った一三―一四世紀のウイグル人によって、ウイグル文字を使い古ウイグル語で書き残されたものである。私はライフワークの一つとして『古ウイグル手紙文書集成』をめざしてきたが、それは Berliner *Turfantexte* シリーズにて歐文で出版することが要請されているため、その原稿は未だ完成していない。ただ、ウイグル手紙文のテキスト自體の収集作業はほぼ終えており、それに基づいて、既に「中央アジア出土古ウイグル手紙文書の書式」という研究篇に相當する論文を完成している。その第五章までの英語版が、昨年の ACTA ASIATICA 九四號に出版された“*Epistolary Formulae of the Old Uighur Letters from Central Asia*”である。とはいえ、そこで提示した手紙の冒頭書式による分類には、その後、細かすぎるとの指摘もあり、す

でに一部に修正を加えた。今回の發表では、全部で十二章となつた本論文の内容より、出土斷簡の中から手紙を探し出すためのキーワードや手紙本體によく使われる慣用表現、書體による時代判定、マニ教・佛教・キリスト教各教徒別の特徴、イスラム教徒の手紙は一件も見つかっていないこと等に焦點を絞つて紹介したい。